

内モンゴル自治区の観光開発に関する地理学的研究・序説

陳 長江

キーワード：内モンゴル自治区, 観光開発, 観光資源, 地理情報システム (GIS)

1. はじめに

内モンゴル自治区は中国北部に位置し、総面積は 118.3 万 km^2 で、日本の総面積 37.8 万 km^2 の約 3 倍に相当する。北東から南西へのびる細長い形状で、東経 $126^\circ 04'$ から東経 $97^\circ 12'$ まで東西の直線距離は約 2,500km、北緯 $37^\circ 24'$ から北緯 $53^\circ 23'$ まで南北の直線距離は約 1,700 km に達する。東部、南部、西部にかけて、順に黒龍江省、吉林省、遼寧省、河北省、山西省、陝西省、寧夏回族自治区、甘肅省の 8 省・自治区と隣接し、北京、天津に近接している (図 1)。北部はロシア、モンゴルと国境を接し、国境線の長さは 4,221 km である。

内モンゴル自治区は中央アジアのモンゴル高原周辺地域に位置し、全域の高度は比較的高く、平均海拔高度は約 1,000m である。そのうち、全区の高原・山地の占める面積は約 70% である。内モンゴル自治区は、中国の 34 ある省・自治区・特別市の一つである。表 1 からも分かるように、経済発展のレベルは中国の沿海地域より遅れている。

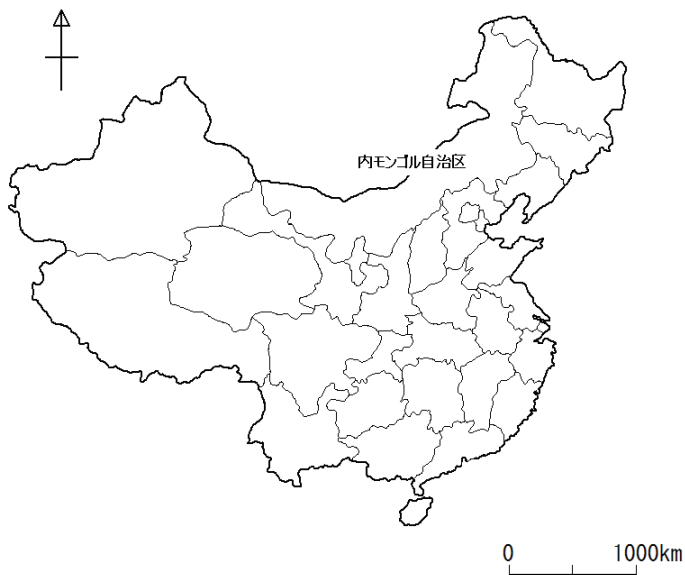


図 1 内モンゴル自治区の中国での位置
出所：本人作成

表1 中国の省、自治区、特別市の人口、面積、GDP、一人あたり GDP (2005年)

省、自治区、特別市	人口 (万人)	面積 (万 km ²)	人口密度 (人/km ²)	GDP (億元)	一人あたり GDP (元)
河南省	9,256	1.68	5,509.52	4,283.30	44,969
山東省	9,079	1.13	8,034.51	2,931.88	35,457
広東省	8,642	18.77	460.42	8,836.90	14,814
四川省	8,329	15.63	532.89	3,042.40	12,320
江蘇省	7,438	118.30	62.87	2,700.00	16,026
河北省	6,744	14.59	462.23	6,872.65	18,965
湖北省	6,744	18.74	359.87	2,958.21	13,310
湖南省	6,440	45.46	141.66	5,303.00	14,430
安徽省	5,986	0.63	9,501.59	7,450.27	51,428
浙江省	4,677	10.26	455.85	15,000.00	24,515
広西壮族自治区	4,489	10.18	440.96	11,243.00	27,552
雲南省	4,288	13.96	307.16	4,812.70	8,597
遼寧省	4,238	12.14	349.09	6,053.00	18,621
江西省	4,140	16.69	248.05	3,500.00	9,439
黒竜江省	3,689	15.67	235.42	15,490.70	20,044
陝西省	3,605	16.70	215.87	8,815.09	11,236
貴州省	3,525	18.59	189.62	6,320.00	11,356
福建省	3,471	21.18	163.88	5,612.26	10,366
山西省	3,297	17.79	185.33	16,040.00	23,604
重慶市	3,090	23.60	130.93	3,320.10	8,762
吉林省	2,728	3.39	804.72	790.12	10,980
甘肅省	2,562	8.24	310.92	2,650.00	10,978
内モンゴル自治区	2,376	48.76	48.73	6,556.00	8,440
新疆ウイグル自治区	1,925	17.60	109.38	1,591.90	4,957
上海市	1,674	39.40	42.49	2,959.48	7,833
北京市	1,328	122.84	10.81	200.00	9,098
天津市	1,001	20.56	48.69	2,883.50	9,844
海南省	787	45.40	17.33	1,540.00	7,341
香港	678	72.12	9.40	465.73	10,043
寧夏回族自治区	562	5.18	108.49	460.30	10,054
青海省	518	165.00	3.14	2,203.00	13,030
チベット自治区	262	0.11	2,381.82	—	—
澳門	44	0.002	22,000.00	—	—
中国	127,612	960.29	132.89		

注：中国元と日本円の換算レートは、1元＝約15円である。

出所：中国統計年鑑2005年より作成

内モンゴル自治区内には、特有の自然環境に根ざした草原や温泉、東西交流の歴史的な古跡をはじめ、豊かな観光資源がある。最近の急速な経済発展と交通の整備充実に伴って、観光業の基本条件が形成されつつある。これらに基づいた地域開発は、内モンゴルの経済、社会、文化の発展を一步推し進めるものと考えられる。

本研究では、今後、過疎地域の開発、エコツーリズムなど、日本の観光地理学の研究を参考にし、また、地理情報システム（GIS）を利用して、内モンゴルの観光資源を調査、分析する。つまり、個別観光地の構成や地域構造、いくつかの観光地の複合体としての観光地域のパターンとその変容を明らかにする、さらには、快適な観光地の環境の形成や保全、内モンゴル自治区の観光開発を計画、検討する。

本研究を進めるに当たり、次のような方法を予定している。

- (1) 日本の観光地理学の文献収集
- (2) 中国内モンゴルの自然環境、社会経済指標などのデータ収集
- (3) モンゴル高原（内モンゴル自治区内）での実地調査
- (4) 地理情報システム（GIS）の適用
- (5) 中国内モンゴルにおける観光開発の検討

2. 内モンゴル自治区の主要な観光地

個々の観光地は、主として観光資源や観光施設、観光客などの特性によって性格づけられ、類型化される。その中で、とくに観光資源のもつ意義は大きい。観光地は観光資源によって、温泉観光地、山岳・高原観光地、海岸観光地、宗教・歴史観光地、都市観光地などに大きく分けられるが、各観光地を構成する観光資源、観光施設、観光産業、観光客の性格に著しい差異が認められる。内モンゴル自治区の場合、内陸に位置しているので、海岸観光地は存在しないが、代わりに、この地域に特有な草原観光地が存在する。

図2に、内モンゴルの主要な観光地を示す。

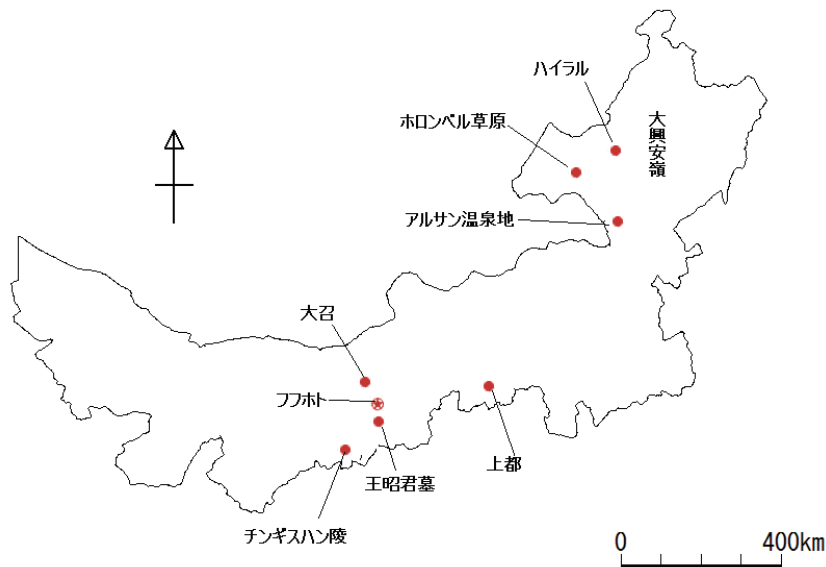


図2 内モンゴルの主要な観光地の位置

出所：本人作成

(1) 温泉観光地

アルサン温泉地は内モンゴルの東北部，大興安嶺の西部にある。アルサンとは「靈驗あたらかな水」という意味である。温泉，冷泉，鉱泉などがあり，毎年観光客が旅行と休養に訪れる。また，この地域には，アルサン温泉群のほか，玫瑰峰石林景区（写真1），好森沟国家森林公园，口岸景区，アルサン国家森林公园（写真2，写真3），日・旧満州戦争の遺跡，白狼林俗村景区，大沙灘旅行区，バヤルフ民俗公園など8つの観光地があり，外資と地元資本による15の旅行会社が地域全体の旅行産業を経営している。

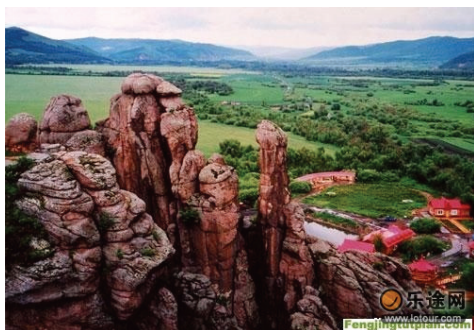


写真1 玫瑰峰石林



写真2 天池



写真3 不凍河

(2) 山岳・高原観光地

大興安嶺山岳観光地は内モンゴルの東北部に位置し、外資による多くの観光施設が建設されている。夏は別荘地などを避暑地として利用し、冬はスキーなどの活動が盛んである。大興安嶺のスキー場（写真4）は年間6ヶ月積雪し、現在、国家スキー場として指定されている。



写真4 アルサン・スキー場

(3) 草原観光地

内モンゴルの東北部にホロンベルという大草原（写真5）があり、そこに原始の草原が残っている。大興安嶺、ハイラルの西に大きな湖と草原が広がって、移動式の住居ゲルが民宿として使われ、地元住民のホスピタリティが高く、観光客の好評を得ている。

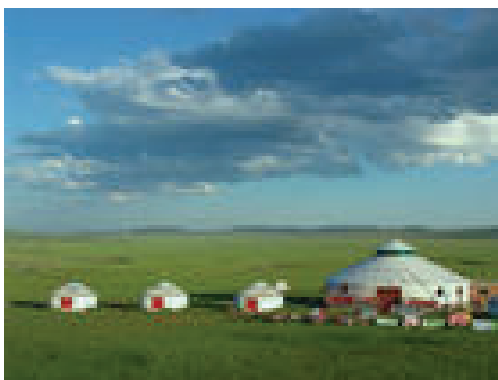


写真5 ホロンベル草原

(4) 宗教・歴史観光地

北京の北方に上都（写真6）、中国語でシャンドゥという歴史的な古跡がある。1256年に建設され、元の皇帝、フビライが夏の都をおいたところで、マルコ・ポーロが東方見聞録で紹介し、ザナドゥの伝説のもとになったところである。明の太祖、朱元璋によってかなり破壊されたが、中国の国内だけでなく、外国にも有名な観光地である。今は、中国の重要な文化財として保護されている。



写真6 元上都遺跡

3. フフホトの都市観光地

内モンゴル自治区の首都、フフホト（呼和浩特）は近年、草原観光で注目されるようになった。また、フフホトは古くからチベット仏教の影響を強く受けた都市であるため、それに関連した史跡が市内に多く残されている。とくに大召付近には席力図召、五塔寺などが集中している。毎月旧暦の15日にはラマ（チベット修行僧）が多く集まり、チベット仏教の雰囲気を感じることができる。また市内には、清真大寺、王昭君墓などの史跡があり、草原観光だけでなく市内観光も楽しめる。

史跡以外にも、博物館、競馬場、公園、広場などがあり、十分に楽しむことができる。フフホト市政府近くの如意広場では、夏の夜に、噴水と光のショーがあり多くの人が集まる。公園、広場は中国人にとって欠かせないものであり、市民の憩いの場である。そこに行けば、一般市民の様子や過ごし方を垣間見ることができる。

(1) 大召

大召はフフホト市の旧城内の南部に位置し、1580年、フフホト初の寺院として建設された。記録によると、トゥメット部のアルタン・ハン（アラ坦汗）は美岱召を建設した後、明朝の支持下で、1579（万暦7）年、市街地と寺院を正式に建設することを決定した。新たに作られた都市では市街地と寺が分かれ、寺院は2年目に落成し、市街地はその1年後に落成した。明朝の皇帝は寺を「弘慈寺」と名づけ（のちの大召）、市街地は帰化城と名づけた（のちのフフホト旧城）。

大召完成後、寺院内に銀の釈迦牟尼像が祭られたため、その当時から銀仏寺と呼ばれるようになった。1586（万暦14）年、ダライラマ3世はトゥメット部の盛大な歓迎式中、オルドスからフフホトに入り、弘慈寺の銀の仏陀の開眼の儀式を主催した。その後、大召は当時の漠南地区（現在の内モンゴル自治区中部から西部にかけての地域に相当する）で最も有名なフフホト最大の寺院となり、歴史上大きな影響をもつようになった。

1627（明熹宗天啓7）年、リンダン・ハン（林丹汗）が“帰化城を攻略し、銀仏寺を奪い取った”と史籍に記載されているように、大召は都市と並べられており、そこからも、大召の漠南での影響の大きさがよく分かる。清朝の太宗ホンタイジは軍隊を率いてフフホトまでリンダン・ハンを追撃した際、部下に市街地に放火するように命令したが、“銀仏寺などの廟だけは残し、壊してはいけない”と命じた。これもまた大召の名声の高さを示している。

ホンタイジはまた、トゥメット部に大召を修築するように命じ、修築後は「弘慈寺」から「無量寺」と名を改めた。これが今日の大召の漢名「無量寺」の起源である。寺院内には、山門、過殿、経堂、九間楼、仏殿などが現存し、そのうち経堂と仏殿は繋がっており、大殿と呼ばれて、仏殿内には彫像と壁画がある。

銀の仏像は400年の時を経て青色に変化しているが、今なお完全に保存されている。

(2) 清将軍衙署旧跡 (将軍府)

清将軍衙署旧跡はフフホト市の新城西路北側に位置し、清の綏遠将軍が駐在した役所で、1737 (乾隆2)年に着工し、1739 (乾隆4)年に完成した。

衙署の真南には「大照壁」と呼ばれる赤い壁があり、この旧跡のシンボルとあってよい。東西の門は轅門と呼ばれ、正門の前には狛犬が置かれている。門をくぐると、綏遠将軍の役所である、大堂、二堂、将軍の寝室である、三堂と四堂が続く。五番目にあるのは後堂で、その両側には花園がある。旧跡内には130の部屋があり、敷地面積は3万km²である。

綏遠将軍は清朝の封疆大臣 (西部地域を治める大臣) という高官で、綏遠地区の最高の軍事行政官吏であった。この府には1737年から1912年のまで175年間に、75人の将軍が任命を受けた。1912年から1913年まで北洋軍閥政府が将軍府と改名し、1914年から1921年までは綏遠都統公署と改名した。1921年、綏遠省政府がここに置かれ、解放後、綏遠省人民政府、内モンゴル自治区高級人民法院、内モンゴル自治区文化庁がここで執務した。

フフホト市政府は清将軍衙署を復元し、観光客が見学できるように開放している。この旧蹟のすぐそばには立体交差があり、そこを東から西へ通るとき、高い位置から旧蹟全体を見渡すことができる。

(3) 五塔寺 (金剛座舍利宝塔)

五塔寺はフフホト市の旧城と呼ばれる地域にある。別名は金剛座舍利宝塔といい、モンゴル語名は「塔奔・斯普日嘎」という。高さは16.5mで、大きな塔の上に、四角形の小さい塔が五つ立ち並び、塔には上から下まで全部で1,000余りの仏像の彫刻が施こされていることから、またの名を「千仏塔」という。北京の真覺寺の五塔は、この五塔寺の造りと類似している。

その造りは均整よく、曲線は調和がとれ、厳かで優美である。下部は金剛座と呼ばれ、須弥山の蓮の装飾で飾られている。金剛座は全部で7層あり、第1層にはモンゴル、チベット、サンスクリットの3種の文字で書かれた「金剛経」が刻み込まれている。各層上部の壁面には黄金の仏像があり、全部で1,000余りの厨子がある。各厨子の仏像は豊かな表情をもち、それぞれ異なっている。南側の門の上にはモンゴル、チベット、漢の3種の文字で書かれた「金剛座舍利宝塔」の文字が漢白玉 (大理石の種類) で飾られた額に納められている。

五塔寺には、中国国内で発見された唯一の少数民族の文字 (モンゴル文字) で書かれた天文図がある。直径144.5cm、天球は北極を中心としたもので、28本の経線と北極圏、夏至圏、赤道圏、冬至圏、南極圏が描かれている。描かれた恒星の数は約270個で、星の数は1,550を超える。この天文図は清朝の天文学の重要な資料であり、貴重な文化財である。

五塔は本来、1727年に建てられたラマ寺、慈灯寺のうちの一つの建物であったが、後に慈灯寺は衰退し、五塔だけが毅然と残った。残った五塔は、雲をものぐやうにまっすぐと伸び、美しく、どこからでも見ることができるので、人々にその存在を知らしめた。そのため数百年来の五塔の苦しみを見て、後の人々はその五塔を「五塔寺」呼ぶようになった。また、この五塔寺には、ダライラマ3世の時代に「釈迦の小指の骨」が持ち込まれ、今でも地下宮殿に眠っているという伝説が残っている。

(4) 王昭君墓

王昭君、字は嬭、前漢の元帝時に、朝廷に入ることを自らの意志で選択し、和親の使者として匈奴の呼韓邪単于に嫁ぎ、寧胡閼氏という名を与えられる。閼氏とは匈奴の君主の

正夫人であることを示している。

王昭君が異国へ嫁いだ 60 年間、漢と匈奴はずっと平和を保ち、匈奴の境界内の経済と文化も発達した。このために王昭君は各民族の人々から尊敬を受けている。

言い伝えによると、王昭君が亡くなったとき、内外の農民、遊牧民が次々と葬式に参列した。彼らはみな衣服に土を詰めて訪れ、その土を積み重ね、それが王昭君墓となった。

王昭君墓はフフホト市郊外の南部 9 km、大黒河の沖積平原に位置している。晩秋、王昭君墓の辺り一面は枯れ果てるが、墓の上の草だけは青々と茂るといわれており、そのことから、別名“青い墓”とも呼ばれている。王昭君墓の高さは約 30m で、園内には植物が生い茂って、さまざまな花が咲き乱れる。また、墓の前には、王昭君と呼韓邪単于の馬に乗っている青銅の銅像を見ることができる。

(5) 内蒙古博物館

内蒙古博物館はフフホト市街中心部に位置する。屋上には空高く疾走する白い駿馬の像が捧げられ、内モンゴル自治区の飛翔、吉祥を象徴している。博物館の総面積は 15,000 m²、展示面積は 7,000 m² である。

内モンゴルの古代生物、歴史、近現代、民族文化の 4 部門に分かれている。この博物館の目玉である古代生物コーナーの恐竜の化石は、高さが 10 数 m にも達する。また、モンゴル民族の衣装や、生活に使われた道具なども陳列されている。恐竜の化石から、モンゴル民族の歴史、風俗に触れることができ、フフホト、内モンゴル、モンゴルに関する知識を深めることができる。

(6) 競馬場

アジア最大と言われる競馬場である。残念ながら普段は馬のレースは行われていない。しかし、8月のナーダム祭りには内モンゴル各地からモンゴル人が集まり、モンゴル相撲や競馬を観戦する。ナーダムの期間以外でも、競馬場の前の広場ではレストランが営業され、モンゴルパオ型の個室でモンゴル料理を楽しむことができる。また、モンゴルの歌や馬頭琴の演奏のライブが行われることもある。

(7) 青城公園

フフホト市内一番の繁華街、中山路西部に位置する公園で、「青城」とはモンゴル語であるフフホトの中国語意識である。公園内は広々としており、たくさんの市民が訪れ、楽しんでいる。公園の一部は動物園になっており、無料で動物を見ることができる(一部有料)。また、観覧車、お化け屋敷などの施設もある。

(8) チンギスハン陵

陵園内の建築は、3つのゲル型の陵宮から構成される。正殿にはチンギスハンの漢白玉(大理石の種類)の彫像が安置されている。正殿の奥には、黄色のゲルがあり、チンギスハン、正妻ボルテと二人の弟ベルグタイとカサルが祭られている。また、西殿、東殿にはそれぞれ、チンギスハンの神器、末子ツルイ夫婦などが祭られている。

陵宮外にはチンギスハンの戦争、戦争の神の象徴といえる「ソルド」、陵園外には「オボー」と呼ばれる、石を積み上げたモンゴル人の心の寄り所といえるものがある。

チンギスハン陵の周囲には、観光用に宿泊ゲルなどがあり、日中は乗馬、夜はオルドス式の結婚式や宴の再現を楽しむことができる。

4. おわりに

内モンゴル自治区には、特有な草原観光地をはじめ、温泉観光地、山岳・高原観光地、宗教・歴史観光地、都市観光地などがあり、観光開発は日進月歩である。

観光開発に伴う多くの問題を解決しなければならない。観光道路の整備、観光地域の季節性、自然破壊、環境汚染など、また、観光開発、運営に対する法律の整備なども目の前に迫っている。観光開発とともに地域の持続可能な発展が必要である。

よりよい観光地域の形成のためには、国家による開発計画と地元住民の協力が必要である。

引用・参考文献

内モンゴル自治区地名委員会（1987）：『内モンゴル地方誌』，445p.

山村順二（1999）：『観光地域論』古今書院，334p.

A geographical research concerning tourist development in Inner Mongolian

CHEN Changjiang

Key Words: Inner Mongolia, Tourist Development, Tourist Resources,
Geographic Information System(GIS)